

二〇一二年八月二七日

片空の雲はあかねに秋時雨
大夕立眼前の景消へにけり
抽んでし尖塔の空帰燕舞ふ
老二人小玉西瓜を持て余す
産声に歓声上がる望の夜
秋霖に濡れし夕刊とどきけり

二〇一二年八月二六日

高速路なぞへに百合のなだれ咲く
みちのくに戻る活気や秋刀魚羅
昨夜の雨晴れて頬なづ風は秋
秋天下淀一望の古墳山
目が合ひて寄り来る鹿の親子かな
城址に佇てばあきつの湧き出づる
雨に濡れなまめく赤や鶏頭花
あきつ群る勤皇志士の旗揚げ場
一門の眠る古墳にカンナ燃ゆ
朝鳩のくぐもり鳴くや秋の杜
方位盤据ゑし山頂帰燕群る
白き帆の一つ浮かぶや秋の雲

二〇一二年八月二五日

秋扇開けば師の句懐かしき
長電話切るに切られず虫すだく
川沿ひの小径間遠に法師蟬
雷光にハンドル持つ手緊張す
木喰と似たる住職笑み涼しい
西日射す岬に白亜の異人館
車とめ鹿の横断待ちにけり
航行の灯に波揺らぐ沖の秋
山上の帰燕を仰ぐ遊子どち
雨晴れて萩の初花雫とも
俯瞰する峽の集落秋澄める

二〇一二年八月二四日

秋の蚊を払ひ井戸端会議かな
秋澄むや山幾重にも袖合はせ

菜々合々

百々合々

菜々合々

雅流

宏虎

よし女

わかば

宏虎

ともえ

菜々

満天

こすもす

きづな

よし女

花茗荷

つくし

雅流

わかば

はく子

よう子

ぼんこ

こすもす

百々合々

よし女

満天

わかば

雅流

きづな

有香

満天

ひかり

母在さぬふるさと遠し盆過ぐる

国宝の天守へここし露の磴

一条の秋日差し込む塗師工房

微笑仏蔵す野寺や豊の秋

二〇一二年八月二三日

縫ひ物の手もはかどるや夜の秋

帰省子を待ちて傘寿の祝ひ膳

鳶かづら宇宙遊泳してやまず

鯉跳ねる音のかそけし秋風裡

風鈴の舌虜とす蜘蛛の糸

ただ無為に池塘もとほる秋思かな

軒高く積まれし薪やちちろ鳴く

白桃の包装過保護かと思ふ

里山の風に屯す赤とんぼ

二〇一二年八月二二日

赤信号わたる秋蝶おぼつか

腰曲がる老婆が仕切る地藏盆

見つめるて何も起こらず蟻地獄

秋天へ透く新駅のドーム屋根

春の園乙女庭師も一景に

二〇一二年八月二一日

鳴きとおす鈴虫の音に寝ねやらず

彫り深き魚板の窪み西日射す

稔り田や孫の生まるる日を数ふ

ワンピース品良く召され生身魂

新機種の話電話に夢中秋灯下

秋の日の炎となりて海に落つ

秋の川風駆けるたび波生まる

早曉の山湖に湧きて霧走る

潮の目の色濃き沖や秋の暮

きづな

菜々

花茗荷

雅流

三刀

有香

ぼんこ

せいじ

なつき

せいじ

わかば

満天

よう子

こすもす

宏虎

ともえ

菜々

菜々

うつぎ

よし女

せいじ

ひかり

こすもす

花茗荷

ぼんこ

はく子

わかば

毎日句会みのる選・二〇一二年八月二九日